ＬＧＢＴの子どもも安心できる学校づくりへ
「ＬＧＢＴ学校生活実態調査 2013」レポート

「いのち　リスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」では、2014年５月に「ＬＧＢＴの学校生活調査」の調査結果を公開しました。

ＬＧＢＴ当事者が、子ども時代に孤立感や自己否定、いじめなどに苦しんでいることは、これまで当事者コミュニティや口コミレベルでは共有されてきましたが、国内においては本格的な調査は非常に少なく、子どもたちの置かれた状況についての客観的な把握が求められています。本調査では多くの方々のご厚意とご協力により、ＬＧＢＴの学校生活について実態を浮き彫りとすることができました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

＜調査の目的＞
国内におけるＬＧＢＴの学校生活に関する調査は依然として少ないため、多数の当事者の体験を集め、今後の望ましい施策を検討する上での基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施しました。

＜調査の方法＞
2013 年 10 月 28 日から 12 月 31 日までの約２ヵ月間、インターネットの無料アンケートサイト「Cube Query」を用いて行いました。スマートフォン、ＰＣから回答できるようにし、同一人の重複回答を避けるためひとつのＩＰアドレスから１回しか回答できないよう制限をかけました。調査の広報は、実施団体である「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」のブログの他、ツイッターやフェイスブック、また各地のＬＧＢＴ団体等にも協力依頼し、そのメーリングリスト等を用いて行いました。また本調査は平成 25 年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業の一環として実施され、金沢大学人文学類の岩本健良准教授に多くの助言をいただきました。

＜調査対象者＞
2013 年末にインターネットを通じて、「小学校から高校の間に関東地方で過ごした経験のある、10 歳以上 35 歳以下のＬＧＢＴ当事者」609 名から回答を得ることができました。

調査の全文はこちらからもダウンロードできます。
「ＬＧＢＴの学校生活実態調査 (2013)」
http://endomameta.com/schoolreport.pdf

（１） 性別違和といじめ被害

ＬＧＢＴ当事者の 7 割にいじめ被害経験がありました。特に性別違和を持つ生物学的男子（MTF, MTX）では、身体的暴力（48%）や、服を脱がされる・恥ずかしいことを強制されるといった性的暴力（23%）などの深刻ないじめを長期にわたって経験している割合が高率でした。男子のコミュニティ内において「男らしくない」とみなされることが、いじめ被害に高率で結びついている可能性が示唆されました。

いじめや暴力を受けた経験（複数回答可）

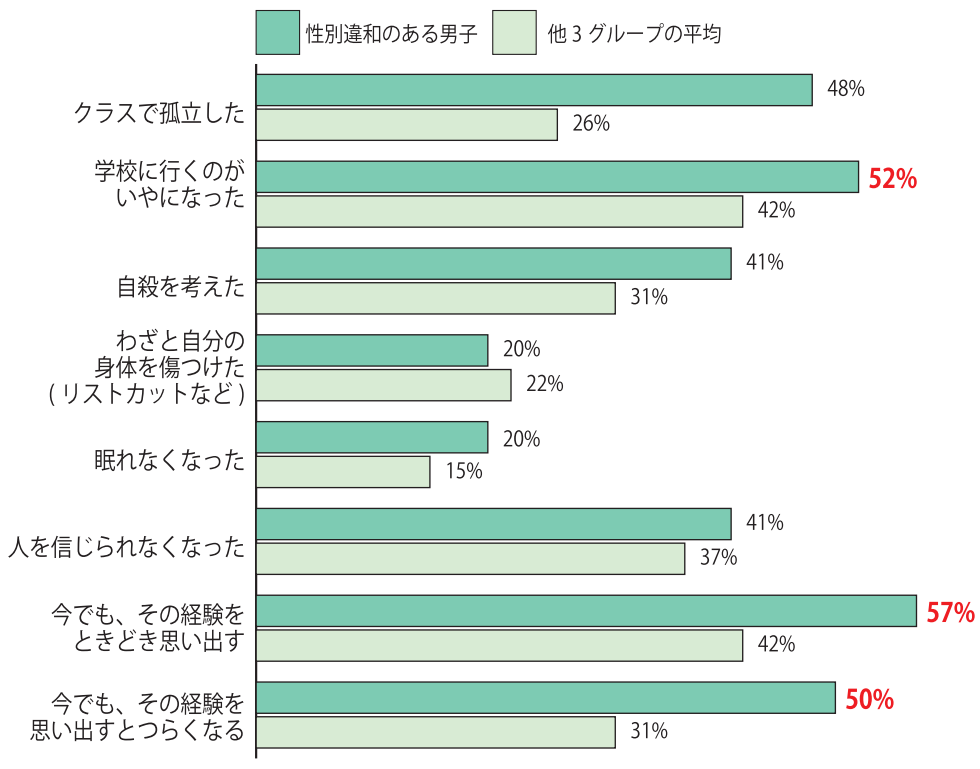
	性別違和のある男子（母数 65 人）	非異性愛男子 *（母数 154 人）	性別違和のある女子 *（母数 180 人）	非異性愛女子 *（母数 210 人）
身体的な暴力	48%	23%	19%	10%
言葉による暴力	78%	53%	54%	45%
性的な暴力（服を脱がされる・恥ずかしいことを強制）	23%	12%	12%	7%
無視・仲間はずれ	55%	34%	51%	57%
上のような経験はない	18%	35%	30%	36%

* 非異性愛：同性愛および両性愛

★本調査における「男子」「女子」について
MTF や MTX または FTM や FTX の場合には、生物学的性には違和感があり、「男性」や「女性」という表記を望まない当事者が多くいます。今回の調査では、学校内でそれぞれが「男子」「女子」として扱われる場面が大半であることを考慮して、あえて生物学的な性に沿った表記とさせていただきました。

また、いじめ被害は、その後の人生にも影響を少なからず与えていることが分かりました。いじめや暴力被害を経験した回答者全体の 3 割が、被害の影響で自殺を考えたと回答しています。また「今でもその経験をときどき思い出す」44%、「今でもその経験を思い出すとつらくなる」33% という回答も目立ちます。これらの影響は、「性別違和のある生物学的男子」では、より高率に見られました。

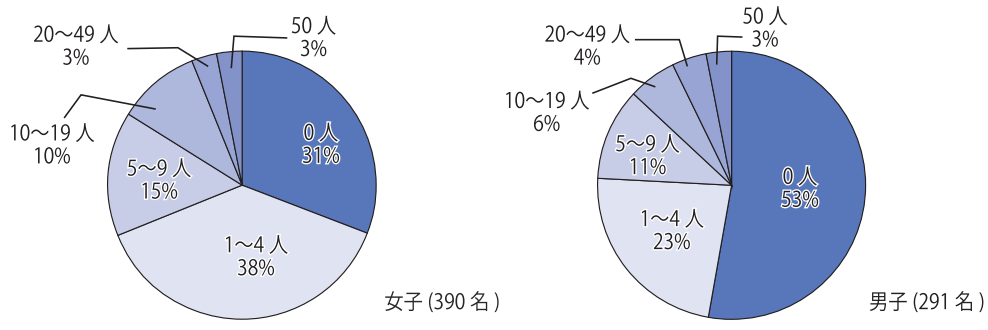
いじめや暴力を受けたことによる影響（複数回答可）



（2） カミングアウトの実態

ＬＧＢＴ当事者の多くは、高校生までに自身の性のあり方について自覚しますが、男子 5 割、女子 3 割は誰にもそのことを打ち明けませんでした。「誰かに話した」という子どもたちでも大半は数人程度に打ち明けている程度で、10 人以上に話せたのは回答者の 2 割にも満ちませんでした。

小学生から高校生の間に自分が LGBT であることを話した人数 (当時)



また、誰かに打ち明けた生徒の場合には、7 割が同級生をカミングアウトの相手に選び、教師や親などの「周囲の大人」を選んだのは 1～2 割程度でした。「ごく親しい親友数人にはものすごく頑張って話すことはできるかもしれないが、大人には言わない」という姿が浮かび上がります。このような傾向があると、大人からは当事者の子どもたちの姿が見えにくく、「ＬＧＢＴの子どもは身近にはいない」という大人たちの誤解が強化されやすくなります。誰が当事者なのかを大人たちが把握できない中で、子どもたち同士の間で、カミングアウトやいじめ加害・被害が起きている現状が想定されます。

（3） 蔓延している「ホモネタ」

子どもたちを取り巻く環境に、いわゆる「ホモネタ」(ＬＧＢＴをネタとした冗談やからかい) が蔓延していることも明らかになりました。学校の友人や同級生がＬＧＢＴについての不快な冗談を言ったり、からかったりしたことがあったかどうか尋ねたところ、回答者全体の 84%は何らかの形でこれらを見聞きした経験がありました。

LGBT をネタとした冗談やからかいを見聞きした経験 (複数回答可)

	性別違和のある男子	非異性愛男子	性別違和のある女子	非異性愛女子
何もしなかった	71%	68%	75%	87%
自分がいじめられないよう一緒になって笑った	17%	38%	25%	30%
やめてほしいと言った	16%	14%	13%	14%
親に相談した	0%	2%	1%	0%
学校の教師に相談した	3%	1%	1%	8%
他の友人や同級生に相談した	3%	2%	2%	2%

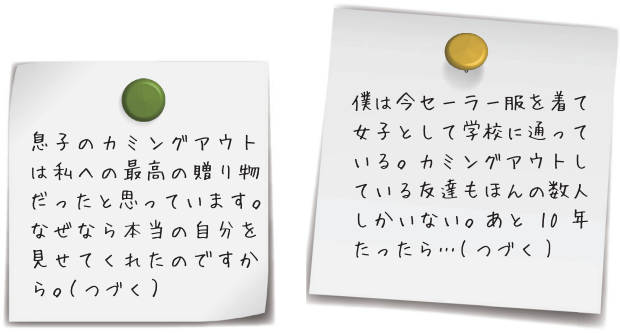
このような場面でどのように対応したかを尋ねたところ、「やめてほしい」と言えたのはごく一部にすぎず、「何もしなかった」が７割強。「自分がいじめられないように一緒になって笑った」も、非異性愛男子では約 4 割にのぼりました。これは、自分がＬＧＢＴでないことを証明するための「踏み絵」のようなつらい体験だと推測されます。

学校をＬＧＢＴの子どもにとって安全な場所にするために

調査からは、ＬＧＢＴの子どもたちのいじめ被害の実態や、カミングアウトをめぐる困難、蔓延している「ホモネタ」について明らかにされました。子どもたちの孤立を防止し、どのような子どもであっても安心して学校に通えるような環境を整えるために、各教育現場での取り組みが必要です。以下は、その取り組みの一例です。ＬＧＢＴの子どもが安心できるような学校環境を整えるために、みなさんの身近なところから「第一歩」を踏み出していただけると幸いです。

性の多様性に関する肯定的なメッセージを伝えてください

保健や家庭科に限らず、国語や英語、社会科の授業などでもＬＧＢＴに関連する題材は扱えます。「いろんな人がいていい」という肯定的なメッセージを常に添えて、いざとなったら相談できる大人がいるサインを出しましょう。



保健室、図書館などにポスターやチラシを置いてください

保健室や図書館などにＬＧＢＴに関するポスターやチラシを置きましょう。周囲に対して正確な知識を共有し、真面目な話題として取り上げやすくなります。また、面と向かってカミングアウトができない子どもたちにも「ここは安全な場所だ」というメッセージを伝えることができます。

いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーンでは、多様な性についてのメッセージパネルとポスターの無料貸し出しを行っています！

■いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーンとは
“性的マイノリティの若者の生きづらさの解消、自殺予防” を活動の主なテーマとして、報提供や啓発活動を行っている団体。
ブログ：http://ameblo.jp/respectwhiteribbon/
E-Mail ：respectwhiteribbon@yahoo.co.jp

このパンフレットは FRUITS & SUITS のご寄付により制作しました。
FRUITS & SUITS は、LGBT のビジネスプロフェッショナルが集まって LGBT 系ビジネスや政治的権利の促進を行っている組織です。

FRUITS & SUITS（フルーツアンドスーツ）：
https://www.facebook.com/groups/839986796034424/
Loren Fykes：Loren@endymion.jp